

大塚初重著

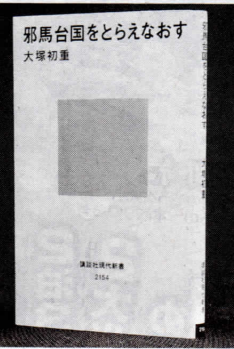
邪馬台国をとらえなおす

評・三浦 佑之 (古代文学研究者)
立正大教授

85歳の今も研究意欲に溢れた考古学界の大御所が、現在もっとも注目されている邪馬台国について論じている。分量の限られた新書でありながら、「魏志倭人伝」本文の解釈か

あふれる柔軟さと良心

固執する偏狭なものではない。九州説への考慮を忘れることはない



講談社現代新書
760円

ら始まり、当時の東アジア情勢の解説、考古学者の真骨頂としての鉄や鏡や土器の解説など、およそ必要と思われることがらをいねいに論じてゆく。そして、そこで語られる内容は斬新かつ柔軟である。

学者として当然かもしれないが、出雲文化圏や北陸への視座が随所に見いだされ、鉄の残り方と土壌との関係、鏡の製作年代と墓や遺跡の年代とのずれが指摘されるなど、新しい成果をエネルギーに吸収しながら、遺物に対する目配りのきいた読み取りの上に立って、大胆な推測が展開される。読んでいると引き込まれてしまうので、たとえば「同じ

出雲であつても、畿内勢力と出雲西部、畿内勢力と出雲東部との交流関係」には差があるという指摘を、そこに違いないと納得してしまう。

九州が畿内かという邪馬台国の所在地に関していえば、著者の立場は畿内説とみなせようが、一方だけに固執する偏狭なものではない。九州説への考慮を忘れることはない

し、「纏向遺跡が邪馬台国の女王卑弥呼の居館跡」とみなすような単純な議論に与することはなく、モノはウソはつかないが、「解析する段階で人間」がかかわるところに考古学の難しさがあると言っている。

学会の中枢にいる考古学者が思考を放棄し「だれもこれを疑わない」と言い放つ金印「漢委奴国王」について、著者は、江戸時代の作かとする金属技術史研究の最新成果をとり上げ、無視できない問題提起として高く評価する。こうした柔軟で自在な思考をだれもが持てば、学問の世界はずいぶん変わるのではないか。

五木寛之との対談『弱き者の生き方』、梯久美子『昭和二十年夏、僕は兵士だった』を通してしか著者の人となりは知らないが、学者の良心と学問の魅力に溢れた本である。

◇おおつか・はつしげー1926年、東京生まれ。明治大名誉教授。著書に『東国の古墳と天和政権』など。